

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	先端社会研究所
大項目	11 教員・教員組織
中項目	
小項目	11.0.2 学部・研究科等の教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。
要素	編制方針に沿った教員組織の整備 授業科目と担当教員の適合性を判断する仕組みの整備 研究科担当教員の資格の明確化と適正配置(院・専院)
小項目	11.0.3 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか。
要素	教員の募集・採用・昇格等に関する規程および手続きの明確化 規程等に従った適切な教員人事
小項目	11.0.4 教員の資質の向上を図るための方策を講じているか。
要素	教員の教育研究活動等の評価の実施 ファカルティ・ディベロップメント(FD)の実施状況と有効性

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 研究所での業務において求められる能力・業績の明確化	→ 所長・副所長・専任研究員・研究員の研究業績の公表(研究所ホームページ、研究所紀要における公表)と研究所での諸業務に対する運営委員会における評価。	B	B	A	A	A
2. 研究所が取り組む各種事業に照らした適切的な人材の配置	→ 研究所が取り組む各事業の人員体制に対する運営委員会における評価の実施。	B	B	B	B	A
3. 研究所が取り組む具体的な研究プログラム内容に照らしての研究員の採用	→ プログラム内容を明記したうえでの公募の実施ならびに選考過程の制度化・透明化。	B	B	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 先端社会研究所紀要を2回/年発行し、所長・副所長・専任研究員・研究員が研究業績を公表してきた。また、これまでの研究所の成果をまとめた、「戦争が生み出す社会」はシリーズで3巻を出版するなど成果を発信した。運営委員会は規程・了解事項にその構成が社会学部から2名、社会学部以外の学部・研究所・専門職大学院から4名とあったがそれぞれ1名3名と変更し2014年度以降の機動性を高めた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 紀要により、各研究班の研究成果や大学院教育支援事業として取り組んでいる「リサーチコンペ採択者」の論文、研究ノートに掲載することで、本研究所の研究・教育活動を広く関係者に知らせてきた。なお、リサーチコンペ採択者の所属研究科が2013年度は社会学部以外の研究科からの応募・採択者があったものの、それ以外は社会学部に偏重している傾向があることより、今後これを改善したい。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今年度以降、予算規模の縮小により紀要の発行回数を減じることとなったため、1回あたりの掲載数、掲載内容の向上を図る必要がある。そのほかにも、各研究班においてこれまでの研究成果をシンポジウムや刊行物として発信することを決定しているがこれらの計画を確実に実行する必要がある。	☆
		その他	☆

目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか それぞれの研究班の活動内容に則した専任研究員を採用している。また、研究所の全体的な事項に対してはRAを採用して、研究活動および研究所運営に能力を発揮している。なお、2013年度末には2名が他研究機関に移籍したが、スムーズに次期研究員の採用活動を実施し、体制を維持した。また、運営委員は社会学部より1名、社会学部以外の学部より3名とからなる構成に学長補佐が加わることであり広範囲にわたる構成となっている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 専任研究員は各班の研究活動の中心となるべく、班の運営、現地調査、成果の発信などに大きく力を発揮した。なお、単年度契約につき継続性に不安が残るが、今後2年間は継続して研究活動を行うこととなっている。他にも、研究所自体の運営に際し、リサーチコミティ等の場で意見を述べている。これらの人員体制に関しても運営委員会において審議・承認の手続きを踏んでいる。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 専任研究員・RAについては、適正に配置していると思われる。研究員は各研究プロジェクトに於いて引き続き研究活動を深め、成果を社会還元する必要がある。また、RAについては、本研究所のあるべき姿を検討するため「先端企画セクション」においてその運営に大きく力を発揮していくべきであろう。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2011年に採用した研究員は採用の際、中国国境/雲南班、南アジア/インド班、日本班のそれぞれに即した研究員を採用、同様に2014年度に欠員補充として採用した2名についても、中国国境/雲南班、日本班を担当する専任研究員を公募した。その際には具体的に「中国社会をフィールドとする研究」「日本社会をフィールドとする研究」との表現を用い、より適正な人材を募る工夫を行った。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 各班の研究内容に即した適任者を採用することができた。また、研究員は各班の研究内容においてその目的に則した活動を行った他これにとどまらず、研究所運営や紀要の刊行に関しても積極的に活動している。また、大学院生教育支援事業に関してもリサーチコンペの運営・院生指導などに取り組んだ。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後、採用活動の必要性が生じた場合にも、同様に研究内容を具体的に表記し公募すべきであるが、付け加えてその時点での必要な能力に関しても可能な限り具体的な表現で募集すべきと考える。なお、現時点で所属している専任研究員については、国際的な共同研究の機会が得られていることより、これを活かし研究活動を行い積極的に成果を発信するべきであろう。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆